

## 飯田市龍江地区における観光農園の展開と経営特性

全 志英

キーワード：リンゴ栽培，天龍峡，観光農園，経営特性，飯田市龍江地区

### I 序論

#### I-1 研究目的

日本の農業は、1960年代前後の高度経済成長に伴う急激な都市化によって大きな変化を遂げた。とくに農村地域は、農産物の生産という従来の役割のほかに新たに様々な役割を担うようになった。その一つとして観光農園の成立等による農村の観光空間化があげられる。観光農園は1965年ごろから本格的に開設されるようになり、全国各地に拡大した（小池，2002）。林（2007）が言及するように、観光農園は高度経済成長期における余暇時間の増大、所得の向上、自家用車所有の増加といった国民生活の変化と、観光客が直接収穫することによる農作業や出荷用の梱包作業の軽減、現金収入の確保、販路の多様化をといった農家の実情の双方のニーズに即した経営形態として発展した。

観光農園に関する既存研究としては、都市近郊という立地条件の視点から観光果樹園の経営について分析した研究（五十里，1968；稲村，1966；助重，1990；高橋，1964；中山，1968；半澤ほか，2010；山村・浦，1982）がある。また、農村の変容と観光農園の取り組みとの関連や観光と農業の関わりの変遷（田辺，1988；藤井，1988）、地域リーダーの役割に注目して観光農業の発展要因を明らかにした研究（林，2007）も蓄積されている。

小池（2002）は茨城県千代田町の観光農園を事

例に、観光農園の成立過程を地域特性と関連づけて分析し、観光客の形態と観光行動を把握した上で、それに対する観光農園の維持要因を解明した。千代田町における観光農園は、国道6号線利用客に依存して成立した。こうした成立背景にもかかわらず、モータリゼーションが進行すると、国道6号線から比較的交通便利性の悪い地域では、果物狩り主体の観光農園が駐車場確保や広大な果樹園の開放などの集客努力がなされ発展した。

岡本（1970）は群馬県渋川市のリンゴ栽培について、観光地周辺という立地条件に注目して分析した。その結果、渋川市のリンゴ生産が伊香保温泉の訪問客に依存し、この地域が持つ不利な自然条件を克服可能にしたことのみならず、観光客の激増と伊香保の観光シーズンがリンゴの収穫期と合致することによって、他地域とは対照的に栽培面積を増加させてきたことを明らかにした。

栗林ほか（2011）は長野県須坂市を事例に、果樹生産を活かしたアグリ・ツーリズムの展開と諸特徴を観光農園や諸団体の経営に視点を当てて明らかにした。須坂市の観光農園は1950年代まで現国道403号線沿いの高畑地区に立地し、その後、1960年に志賀・草津高原ルートが開通することで交通量が増加し、高畑地区の北側と高梨地区でも開園していった。さらに本郷町で1987年に広域農道が全通すると、広域農道沿線に農地を所有する農家はそこを通過する観光客を相手に観光農園を開設したことを明らかにした。

以上の既存研究で示されたように、観光農園は都市や観光地からの近接性、それに関連する交通環境の変化など立地条件に基づいて開設され、集積してきた。また、観光農園に関する従来の研究成果は、高度経済成長期に観光農園が大きく発展したことを分析している。しかし、観光客の行動や求める要素に変化が生じており、観光農園の経営も多様化してきている。このように観光客のニーズが多様化していく中で、観光農園がどのようなプロセスを経て変化するのかについて検討するためには事例研究の蓄積が必要である。

そこで本研究では、長野県飯田市の龍江地区における観光農園の展開と経営特性を明らかにする。以下の分析は龍江地区で観光農園を営むリンゴ栽培農家を中心に実施した聞き取り調査に基づく。

### I-2 研究対象地域の概要

龍江地区は飯田市街地の南部、天竜川の東岸に位置する(第1図)。地区南部の天竜川沿いには著名な景勝地である天龍峡がある。また、天竜川沿いから東部へと標高が高くなるにつれ年平均気温が下がり、標高683.7mの高森山に至る。天竜川に沿って主要道路が南北に走っており、龍江地区は飯田市街地まで10km程の位置にある。国道151線とJR飯田線は川の右岸にある。龍江地区に最も近い駅は「天龍峡駅」で、天龍峡の西岸に立地している。龍江地区は1964年に飯田市に合併された。2012年6月現在、龍江地区の人口は3,028、世帯数は981である。

天竜川沿いに広がる旧飯田市の農業については、1950年時点では、米や養蚕、畑の栽培面積が多くを占めていた。一方、果樹栽培面積はわずかであった。その後、養蚕は著しく衰退したが、果樹、とくにナシ、モモ、リンゴの生産が1980年代半ばまで大きく成長した(第2図)。飯田市の果樹全体の栽培面積は1995年から減少しているが、柿の栽培面積は増加している。飯田市の年降水量は1627.9mm、年平均気温は13.4℃である。

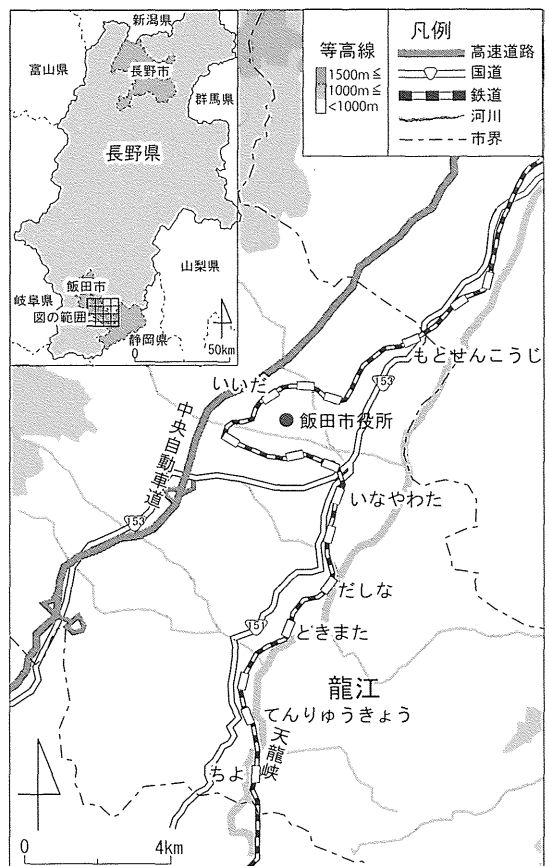
2005年現在、龍江地区の果樹栽培面積は地区全

体の栽培面積の8割以上を占めている。とくに龍江地区ではリンゴ栽培が盛んである。その理由は天竜川、すなわち西に向って標高を下げる傾斜地であること、また排水がよいためである。2005年時点での農家数は専業農家が32戸、第1種兼業が29戸、第2種兼業が92戸である(農業センサス)。

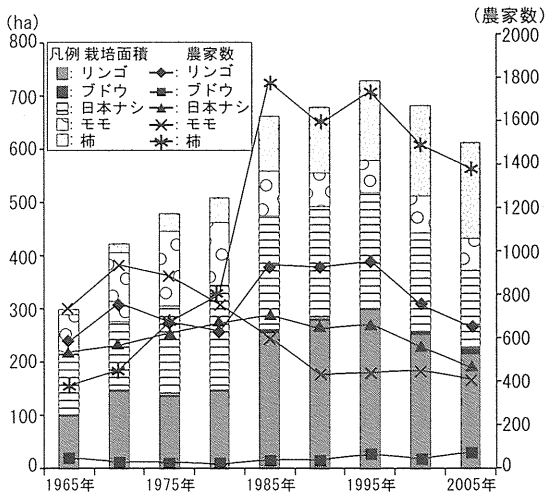
## II 飯田市龍江地区における観光農園の展開

### II-1 リンゴ栽培の開始

龍江地区におけるリンゴ栽培は、1929(昭和4)年に林角雄氏と塩沢しげし氏の両名が副業として、さらに松尾伝三氏が本業として天龍峡付近において開始したことに始まる(龍江村誌編纂委員会, 1997)。同年に龍江失業補習学校の専任教師として着任した清水重美氏は、1932(昭和7)年、



第1図 研究対象地域



第2図 飯田市における果樹栽培面積及び農家数の推移

注1) 1965年は成園の農家数と面積

注2) 1970年以後は成園と未成園を含めた農家数と面積

注3) 2005年以後は販売農家数と面積

(農業センサスにより作成)

実習地(樋ガ沢)にリンゴなどを植えて指導した。また、1930年代前半、堀廻の松尾新人ら4人衆は松尾伝三氏の助言でリンゴ栽培を始めた。これらを契機として、龍江地区内各地でもリンゴの栽培が本格的に始められた。

1939(昭和14)年の伊那園芸協会龍江支部の組合員は16名で、それぞれの生産者が荷印をつけ、市場へ出荷した。しかし、1941(昭和16)年の作付統制令によりリンゴの増殖は禁止され、食糧増産政策がとられた。戦後の1948年頃からリンゴ栽培が再び開始され、1950年には栽培面積が11haに、その後も徐々に増加していった。龍江地区では、1970年に果樹(主にリンゴ)の生産額が1億円を超え、養蚕収入を上回った。

## II-2 天龍峡とリンゴ農家との関係

天龍峡は1847(弘化4)年に阪谷朗蘆により命名され、当時の文人墨客などに好まれた(下伊那教育会地理委員会, 1994)。1882(明治15)年に日下部鳴鶴によって天龍峡十勝が選定され、知名

度が高まっていった。1908(明治41)年には日本新聞社による「避暑地」ランキングの第3位となった。また、1915(大正4)年の「新日本十景」にも選定され、天龍峡は下伊那地方を代表する観光地となった。

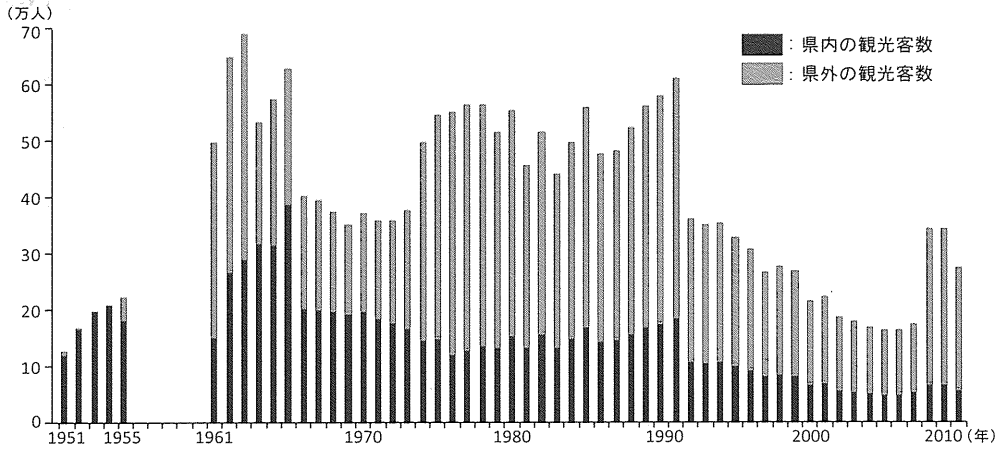
1927(昭和2)年に伊那鉄道が飯田駅から南に延長され、天龍峡駅まで開通すると、天龍峡を訪れる観光客が急増した。また、同年には日本新八景「溪谷の部」の第1位となり、知名度がさらに増した。中山晋平作曲による「竜峡小唄」の大ヒットにも後押しされ、全国的に知られる観光地となった。

1948年、飯田線に急行列車が導入されるとさらに観光客が増加した。1950年に天龍峡に近接するリンゴ果樹園に観光客が訪問し、リンゴの直売やもぎ取りが始まった。また、1955年7月に天龍峡のつつじ橋が完成すると、川路側の舟つき場を下船した観光客が橋を渡って龍江地区側に来るようになった。これをきっかけとして、天龍峡の東側に立地する龍江地区のリンゴ農園に本格的に観光客が訪れるようになり、リンゴ直売からリンゴ狩りへと形態が変化した。また、1964年には飯田線において「りんご狩り貸切臨時列車」が運行されるなど、天龍峡観光を中心としたリンゴ狩りが浸透していった。

天龍峡を訪れる観光客の数は1961年から1966年まで県外の観光客と県内の観光客がほぼ同程度であったが、1967年からは県内の観光客より県外の観光客が多くを占めるようになった(第3図)。

## II-3 中央自動車道の開通と観光農園の発展

1975年8月に中央自動車道恵那山トンネルが開通すると、中京圏からリンゴ狩りに訪れる観光客が増加した。さらに、同年、天龍峡観光組合(会員16名)が発足し、翌年には農協との協議の結果、天龍峡りんご狩り組合を組織し、リンゴ狩り案内センターができた。天龍峡りんご狩り組合には17戸のリンゴ農家が加入し、彼らが観光農園を本格的に開始した。観光農園の最盛期は1975年から1990年までであり、組合に対して企業の団体旅



第3図 天龍峡における観光客の推移

注1) 1953年, 1954年は県内と県外の観光客の区別なし

注2) 1956年から1960年まではデータなし

注3) 1964年から1966年までは飯田市・天竜村天龍峡県立公園の観光客の合計

注4) 2009年から2011年までは天龍峡と天竜川下りの合計

(長野県観光部観光企画課データにより作成)

行や旅行会社から観光農園ツアーの依頼が頻繁になされた。この時期には、天龍峡りんご狩り組合加入の観光農園のみでは企業の団体旅行や旅行会社からの依頼に応えられなかったため、近隣のりんご農家に加入を勧めた。その結果、観光農園を始めるりんご農家が増え、1994年には観光農園数は36となった。しかし、バブル期以降、天龍峡に訪れる観光客が減少し、1990年代後半になると観光農園に訪れる観光客数も減少した。同様第3図からも、1991年以降、天龍峡における観光客数が大きく減少したことが分かる。

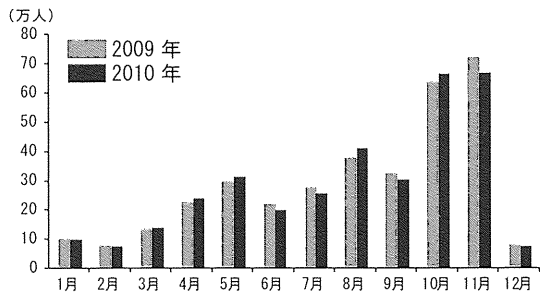
#### II-4 天龍峡観光の変質と観光農園

観光農園が開始された当初は、天龍峡への訪問客が観光農園に立ち寄る傾向が強いことが特徴であった。しかし、現在ではこの組み合わせに代わり、りんご狩りを主目的に訪問する固定客が中心となってきた。もちろん、従来型の組み合わせ形態をとる新規顧客もある程度存在する。というのも、天龍峡における年観光客の3割は10月と11月に集中し(第4図)、天龍峡周辺の紅葉を目的で来

る観光客が多い。また、この時期は龍江地区の観光農園がふじを収穫する時期でもあるためである。

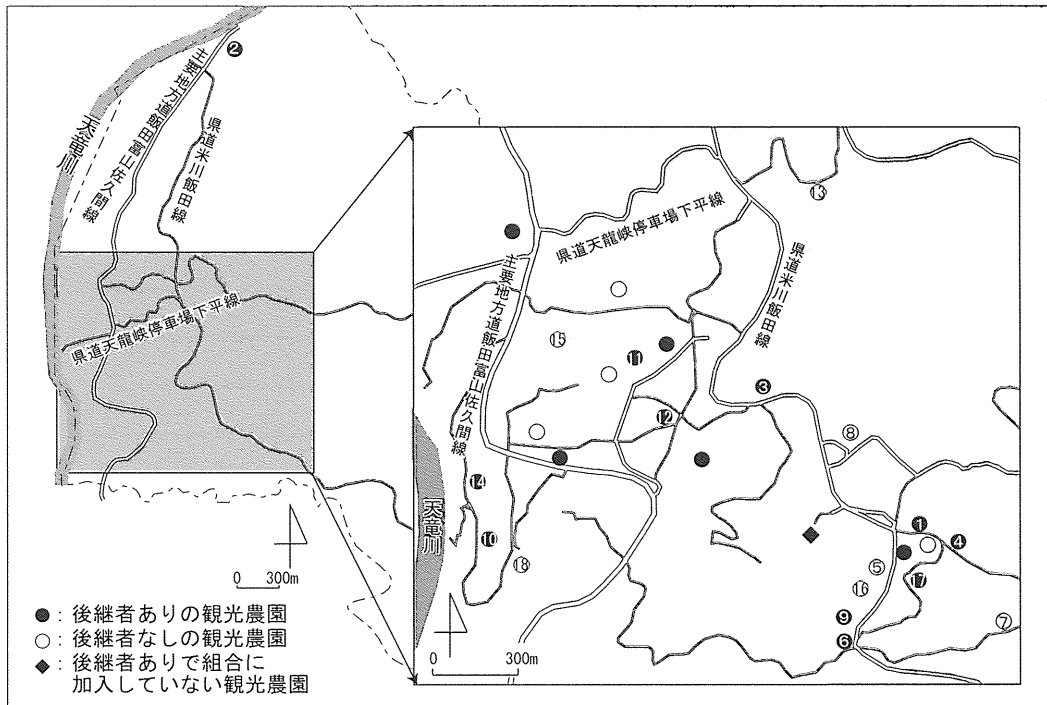
2010年1月、天龍峡りんご狩り組合事務所が廃止された。龍江地区における個々の観光農園が固定客を確保したことや贈答品としてのりんご販売が増加したこと、事務所の運営費がかかることが理由である。ただし、りんごの収穫時期のみ、臨時事務所を開いており、訪れる観光客に案内している。2012年5月現在、天龍峡りんご狩り組合に加入している観光農園は28軒である。

龍江地区における観光農園の分布をみると、天



第4図 天龍峡・天竜川下りににおける観光客数

(長野県観光部観光企画部の提供資料により作成)



第5図 龍江地区における観光農園の分布（2012年）

（聞き取り調査により作成）

龍峡から東に向かって広がっている（第5図）。天龍峡駅に近接する場所のみならず、標高の高い東部にも分散している。また、全体の約60%が後継者を確保している。

### Ⅲ 龍江地区における観光農園の経営特性

ここでは龍江地区における観光農園での聞き取り調査結果に基づいて、その経営内容を述べる。聞き取り調査を行った観光農園は、全28軒のうち18軒である。

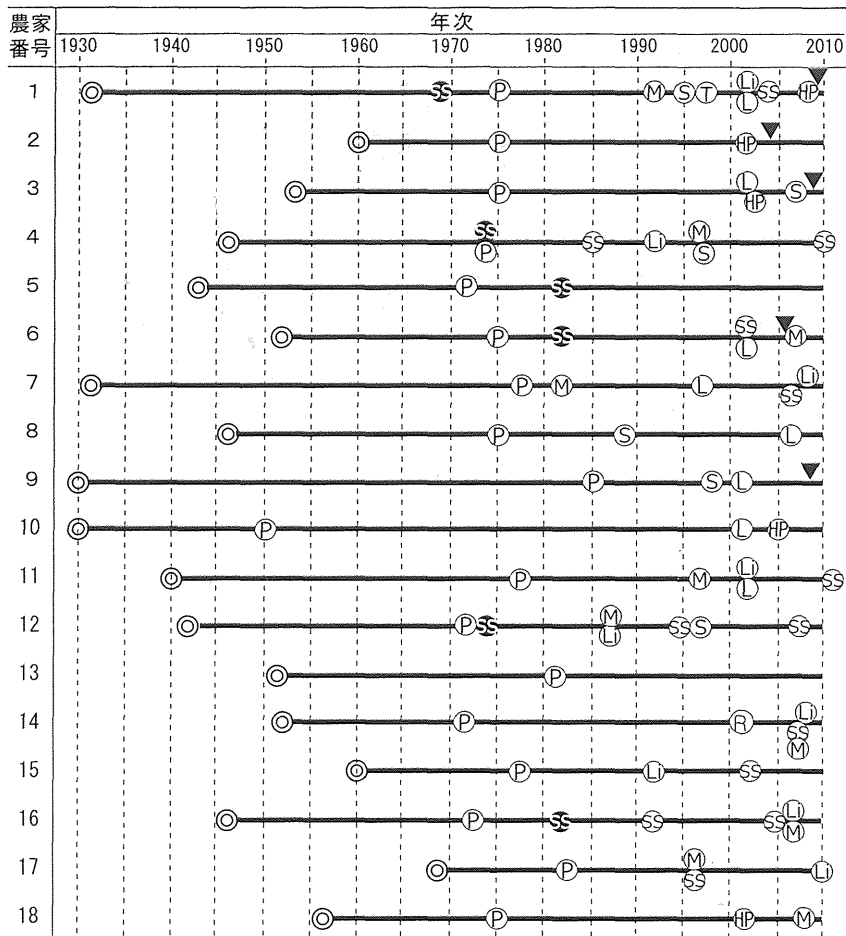
#### Ⅲ-1 観光農園経営の展開

第6図をみると、龍江地区における観光農園のリンゴ栽培は、1930（昭和5）年から1950年半ばまでに始められたことが分かる。また、1950年には観光農園はわずか1軒であったが、中央自動車道の開通を契機として、1975年前後に多くのリンゴ農家が観光農園を始めた。

1960年後半ごろは2～3軒のリング農家が共同で機械を導入する程度であったが、1990年代以降はほとんどの観光農園がリフト、SS機（スピードプレーヤー）、モアなどの機械を個人で所有するようになった。導入した機械の中でもSS機は労働時間を最も短縮させ、2台目を購入した農家（農家番号4、12、16）もいる。機械の導入が早い農家は1980年代に購入したが、大部分の農家は選別機、低温冷蔵庫、トラクターなどを2000年代前後から導入している。

#### Ⅲ-2 観光農園にみられる経営特性

第7図をみると、観光農園を経営する農家は専業農家が多く、基本的に家族労働力で観光農園を経営している。労働力の男女比はほぼ同じであり、年齢構成をみると、50歳以上の従業者の割合が高く、とくに60歳以上の割合は約5割以上を占めている。経営者の高齢化が進行しているものの、約6割以上の農家で後継者が存在する。しかし、後



◎: りんご栽培開始 ▼: 現在の帰農者 (P): 観光農園 (HP): ホームページ (L): 低温冷蔵庫 (Li): リフト  
 SS: 共同用のスピードスプレーヤ S: 個人のスピードスプレーヤ (M): モア (T): トラクター  
 (S): 選別機 [ ]: 親がりんご栽培した期間 [ ]: 帰農者がりんご栽培している期間

第6図 龍江地区における観光農園の経営展開

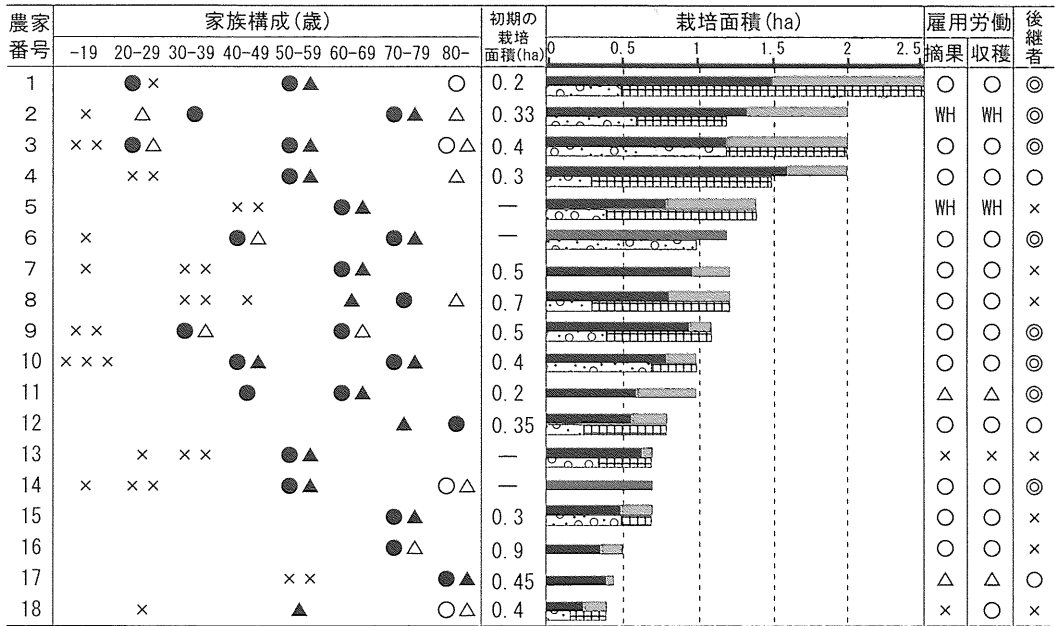
(聞き取り調査により作成)

継者が確保できていても、摘果やふじの収穫時期になると飯田市のシルバー人材派遣センターから労働力を補っている農家もある。また、南信州観光公社によるワーキングホリデー制度を利用して労働力を確保している農家もある。

観光農園の半数以上でりんご栽培面積は1haを超え、りんご栽培開始当初と比べてその規模は拡大している(第7図)。また、りんごの栽培面積に占める主な品種はふじであり、りんご狩り向けよりも贈答品向けの面積が約7割以上を占めている。

りんごの収穫時期は8月から11月までで、8月から観光農園を開始する(第8図)。ただし9月中旬から収穫可能となる品種が多い。

第9図は長野県におけるりんご品種別の栽培面積と生産量を表している。とくに1973年からふじが栽培面積と生産量ともに増えつつある。一方、祝・旭、紅玉、国光、ゴールデンデリシャス、デリシャス系、陸奥、印度は徐々に減少し、2000年以降はほとんど栽培されていない。この傾向は龍江地区も同様であり、祝・旭、印度、国光はかつて盛んに栽培されたものの、現在ほとんど栽培さ



●: 男性(農業従事者) ○: 男性(非農業従事者) ▲: 女性(農業従事者) △: 女性(非農業従事者) ×: 学生・子供など  
 雇用労働 ○: 短期効用 △: 親戚など ×: なし WH: ワーキングホリデー参加者  
 後継者 ◎: 第1世代と第2世代の後継者と一緒に栽培している ○: 後継者が控えている ×: ない  
 栽培面積 ■: 現在, ふじの栽培面積 □: 現在, ふじ以外の種類の栽培面積 ▨: 種類ごとの栽培面積, 不明  
 □: 観光農園 田: 贈答用

第7図 龍江地区におけるりんご農園の農業経営(2011年)

(聞き取り調査により作成)

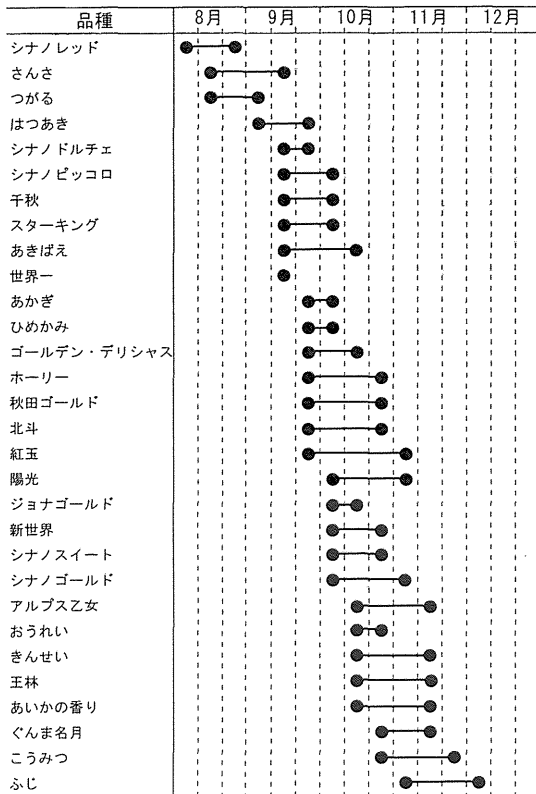
れていない(第1表)。また、「信州!りんご三兄弟」である秋映、シナノスイート、およびシナノゴールドはほとんどの観光農園で栽培されている。これ以外の品種は、つがる、シナノドルチェ、紅玉、陽光、アルプス乙女、王林などである。とくに、龍江地区では紅玉が栽培されていることが特徴である。紅玉は酸味が強く果肉のきめが細かいことから、アップルパイやジャムなどの加工品用として好まれるためである。

りんご以外にはブドウ、桃、プルーン、スモモ、梨、梅、柿も栽培している。これらの果実は観光農園でもぎ取り向けではなく、自家用に加え、直売所での販売、また加工品としても使用される(第1表)。

りんごジュースの販売は1980年代から始まり、りんごジャム、梅ジュース、梅ジャム、市田柿なども加工品として販売されている。とくに市田柿は飯田市の特産品であり、観光農園経営農家の約

6割以上は販売の目的で栽培している。しかし、市田柿の収穫・加工は、ふじの収穫時期と重なるため、労働力不足が深刻な時期でもある。

第10図から観光農園における収益割合をみると、贈答用販売が半数以上を占めており、次に観光農園でもぎとり入園料や直売販売が約4割を占めている。残りの約1割は地元市場や農協に出荷している。また、観光農園の主な集客圏は中京圏である。観光農園のおよそ半数がホームページやダイレクトメールの発送、パンフレット作成を行い、直接旅行会社に営業に出向いて集客活動を行っている。それに対して、宣伝活動をほとんど行わない観光農園もあり、親戚による口コミなどを通して関西や関東に贈答用りんごを宅配している。



第8図 龍江地区におけるリンゴの収穫時期 (2011年)

(聞き取り調査により作成)

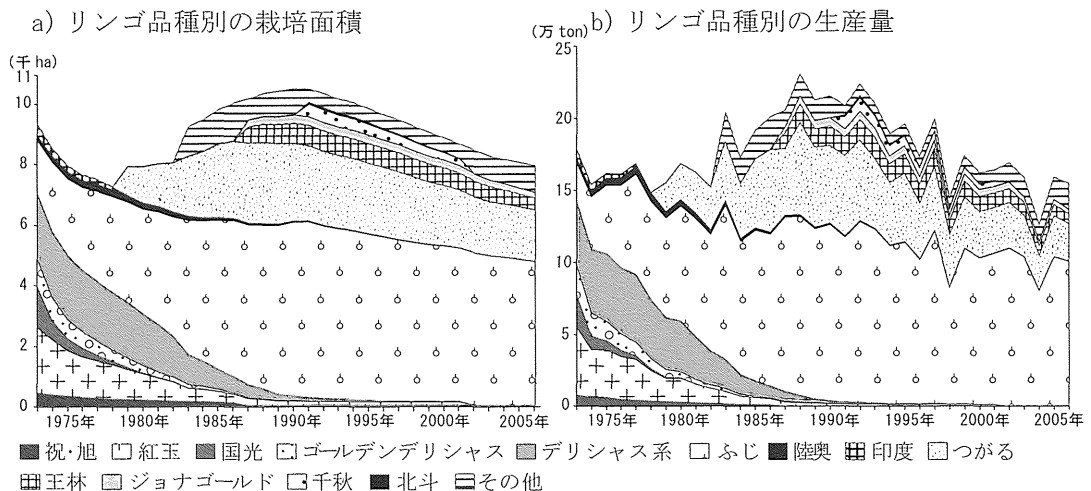
### Ⅲ-3 観光農園経営の事例

#### 1) 農家番号1の事例

天龍峡の東に位置する堀廻地区の農家番号1は、1931(昭和6)年にリンゴ栽培を始め、1975年に天龍峡りんご狩り組合に加入し、観光農園経営を開始した。

1930年代、リンゴ栽培面積は0.2a程度であり、名古屋市場に出荷していた。2011年現在、リンゴ栽培面積は2.5haであり、贈答用が2ha、リンゴ狩り用が50aである。また、ふじが全体の6割を占めている。農業従事者は50歳代の世帯主と妻、および息子である。息子は20歳代であり、2009年に農業専従者になった。雇用労働力は収穫時期にシルバー人材センターから1日2名で1週間、雇っている。また、常時1人を雇っている。

1年間の作業は、リンゴの場合、1月から3月中旬まで剪定、4月下旬から6月下旬まで摘果が行われ、8月下旬から12月初旬まで収穫する(第11図)。また、収穫が終わったあとに施肥し、3月中旬から10月下旬まで2週間に1度、全部で13回から14回を防除する。除草は4月初旬から10月の間に何回か行う。桃は3月下旬から4月初旬まで摘らいし、4月中旬、6月初旬、6月下旬の3度に分けて摘果し、7月中旬から8月下旬にかけ



第9図 長野県におけるリンゴ品種別の栽培面積及び生産量

(果樹生産出荷統計により作成)



第1表 龍江地区におけるりんごの種類および加工品 (2011年)

農家番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
りんごの種類	旭	△	—	△	△	△	×	×	△	×	△	×	—	—	△	—	△	△	△
	祝	△	—	×	△	△	×	△	△	×	△	△	—	—	△	—	△	△	△
	印度	△	—	×	△	△	×	△	△	△	△	△	—	△	△	—	△	×	△
	国光	△	△	△	△	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△	—	△	△	△
	シナノレッド	○	○	○	△	×	×	○	×	×	○	○	×	×	×	○	×	△	×
	さんさ	△	×	×	×	×	×	△	×	△	○	○	△	×	△	○	×	×	○
	つがる	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○	○
	はつあき	△	×	×	△	△	×	△	×	△	○	×	×	×	×	×	△	×	×
	シナノドルチェ	○	○	○	×	○	×	○	○	×	○	○	×	×	○	○	○	×	×
	シナノピッコロ	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○	×	△	×	×
	千秋	△	×	×	△	△	△	△	○	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△
	スターキング	△	○	×	△	△	○	△	×	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△
	秋映	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	×	○	○
	世界一	△	○	○	△	○	△	×	△	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△
	あかぎ	△	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×
	ひめかみ	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	△	×	×	×	×	△	×	○
	ゴールデン*	△	○	×	△	△	×	△	×	△	×	△	△	△	△	△	△	△	△
	ホーリー	×	×	×	△	△	×	×	×	△	×	△	×	△	×	○	△	△	×
	秋田ゴールド	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	△
	北斗	△	○	○	△	○	○	×	△	○	○	△	○	△	×	△	△	△	○
	紅玉	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△
	陽光	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○
	ジョナゴールド	×	○	×	△	△	△	×	○	△	○	△	△	○	○	△	△	○	×
	新世界	△	○	×	△	×	○	○	○	△	○	△	△	△	×	△	△	○	△
	シナノスイート	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	シナノゴールド	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	アルプス乙女	○	○	○	△	○	○	○	×	○	○	○	○	△	○	○	△	△	○
	おうれい	×	×	×	×	×	×	△	×	△	×	×	△	×	×	△	△	△	○
きんせい	△	○	×	×	○	○	×	×	○	○	△	△	△	△	△	△	△	○	
玉林	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
あいかの香り	△	○	×	×	○	○	○	○	△	○	○	×	×	△	○	×	×	○	
ぐんま名月	○	○	○	×	×	○	×	×	○	×	○	×	○	○	○	×	×	×	
こうみつ	△	○	×	○	×	○	×	△	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
ふじ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
その他	巨峰	×	○	×	△	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	△	×	△	
	桃(あかつき)	○	×	×	○	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	
	桃(なつっこ)	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	
	桃(川中島白風)	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	
	ブルー	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	
	すもも	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	
	梨(豊水)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	
	西洋梨	×	○	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	
うめ	○	×	○	△	×	○	○	○	○	○	△	×	×	○	○	×	△		
加工品	リンゴジュース	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	リンゴジャム	○	○	○	△	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	△	△	○	
	リンゴジェラート	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	
	梅ジュース	○	×	○	△	×	○	○	○	○	△	×	×	○	○	×	△	○	
	梅エキス	○	×	○	△	×	×	△	×	×	○	△	×	○	△	×	×	×	
	かりんエキス	○	×	○	×	×	○	△	×	△	×	△	×	×	×	×	×	△	
	山ブドウジュース	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	山ブドウジャム	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
市田柿	○	×	○	○	○	○	○	○	○	▽	×	△	○	○	○	○	△		

○:栽培している ×:栽培していない △:栽培したことがある —:不明

注1) ゴールデンはゴールデンデーリシャスを言う

(聞き取り調査により作成)

農家 番号	収益の割合 (%)					宣伝方法				主な集客圏	
	0	20	40	60	80	100	HP	DM	P		T
1	[観光農園] 60%					○	○	○			名古屋(60%) + 岐阜 + 静岡
2	[観光農園] 100%					○					名古屋
3	[観光農園] 100%					○		○	○		名古屋
4	[観光農園] 100%						○	○			贈答: 愛知 + 岐阜, 名古屋・静岡・滋賀・三重
5	[観光農園] 100%										静岡・愛知・岐阜・大阪
6	[観光農園] 100%							○	○		三重, 愛知, 岐阜
7	[観光農園] 100%										中京: 岐阜 + 愛知(80%), 三重 + 静岡 + 大阪 + 関東
8	[観光農園] 100%						○	○			中京
9	贈答 > 観光農園 > 地元市場 > JA						○	○			名古屋・岐阜・大阪・千葉・東京 + 九州(口コミ)
10	[観光農園] 100%					○	○	○			中京
11	贈答 > 観光農園									○	中京, 名古屋・関西
12	[観光農園] 100%										中京 + 関東(親戚), 1970年半ば, 大阪に親戚からの口コミ
13	[観光農園] 100%						○				岐阜・愛知県・静岡・名古屋
14	[観光農園] 100%						○	○			愛知県(70%) + 静岡 + 佐賀 + 岐阜 + 大阪 + 兵庫 + 東京
15	[観光農園] 100%								○		名古屋(50%) + 関西(50%)
16	[観光農園] 100%										中京(50%) + 関西(30%) + 関東(20%)
17	[観光農園] 100%										愛知県(親戚の 口コミ), 静岡, 大阪, 岐阜
18	[観光農園] 100%					○	○	○	○		中京: 愛知・岐阜・静岡・三重 + 関西・九州・北海道

収益の割合 [観光農園] [贈答] [その他]

宣伝方法 HP: ホームページ DM: ダイレクトメール P: パンフレット T: 旅行会社

第10図 龍江地区における観光農園の経営内容 (2011年)

(聞き取り調査により作成)

作業内容	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
リンゴ					[無駄な枝を切る]	[除草]	[除草]			[収穫]	[ふじの収穫]	
直売所										[堆肥]	[堆肥]	[堆肥]
堆肥・防除			[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]
桃			[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]
堆肥・防除			[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]	[防除期間]
柿						[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]	[摘果]
堆肥・防除						[堆肥]	[堆肥]	[堆肥]	[堆肥]	[堆肥]	[堆肥]	[堆肥]
草刈り				[草刈り]	[草刈り]	[草刈り]	[草刈り]	[草刈り]	[草刈り]	[草刈り]	[草刈り]	[草刈り]

作業内容 [ ]: 剪定 [ ]: 摘果 [ ]: 無駄な枝を切る [ ]: 除草 [ ]: 除草 [ ]: 収穫 [ ]: ふじの収穫  
 [ ]: 摘らい [ ]: 柿を剥いて干す ○: 堆肥 [ ]: 防除期間

第11図 農家番号1の果樹栽培の作業暦 (2011年)

(聞き取り調査により作成)

て収穫する。また、12月下旬に1度施肥し、3月下旬から8月下旬にかけて週に1度、全部で10回を防除する。柿は6月下旬から7月初旬まで摘果し、10月下旬に収穫して11月中旬まで剥いて干す。

6月下旬に1度、施肥する。2011年は10月1日から12月下旬まで開園し、入園料は食べ放題で500円であった。

宣伝活動としては2008年にホームページでの情

報発信を開始した。また、固定客の口コミも広まり、7月に200通、12月に400通の葉書を送った。そのうちの約8割からは実際に注文を受けている。

## 2) 農家番号2の事例

天龍峡の約5km北に位置している農家番号2は、1960年代にリンゴ栽培を始めた。1975年の中央道恵那山トンネル開通により、中京圏からリンゴ狩りに訪れる観光客が増加したことがきっかけで、同年に天龍峡りんご狩り組合に加入し、観光農園の経営を開始した。農家番号2は、龍江地区における観光農園の集中団地（堀廻団地、中央団地、天龍峡団地）から離れており、アクセス面では他の観光農園に比べて不利であった。しかし、温泉（丸山の湯）の近隣に立地するという条件のもとで、温泉を利用する観光客が多数通過することによって、観光農園として成り立つことができた。

1960年代のリンゴ栽培開始時の栽培面積は0.3aであった。2011年現在、リンゴ栽培面積は2haへと拡大し、おおまかには贈答用が80a、リンゴ狩り用が60a、リンゴオーナー用が60aである。また、リンゴの品種はかつては紅玉、国光が主体であったが、1970年代からはふじを栽培している。現在、栽培しているリンゴの品種は48種類である。農業従事者は、70歳代の世帯主と妻、および30歳代の息子の3名である。息子は2004年に後継者となった。

摘果時期にはシルバー人材センターから1日2名で1カ月半、収穫時期には1日2名で15日間、雇っている。さらに、2006年から南信州観光公社が仲介するワーキングホリデー参加者によって労働力を確保している。

2011年は8月1日から12月上旬まで観光農園を営業し、入園料は食べ放題で500円であった。また、1986年からリンゴオーナー制度を始め、約100本の木をリンゴオーナー制度で使用している。これに使用するリンゴの品種はふじ、王林、シナノスイートであり、収穫保障として35kgが設定され、

第2表 農家番号2の料金（2011年）

### a) リンゴオーナー

種類	保障収穫(kg)	料金(千円)	備考
ふじ	35(約115個)	20	10本
ふじ	45(約145個)	25	30本程度
ふじ	55(約175個)	30	60本程度
王林	35(約115個)	20	3本
シナノスイート	45(約145個)	25	2本程度
シナノスイート	55(約175個)	30	2本程度

### b) 加工品

種類	量	料金(円)
リンゴジュース	1本(1L)	400
リンゴジャム	200g	400
アップルバター	200g	500
プラムジャム	200g	500
山ぶどうジャム	200g	600

### c) 宅配

	量(kg)	料金(円)
リンゴ	5(約15個)	3,500
	10(約30個)	5,500
	15(約45個)	7,500
ジュース	8本入り	3,500
	12本入り	6,200

(聞き取り調査により作成)

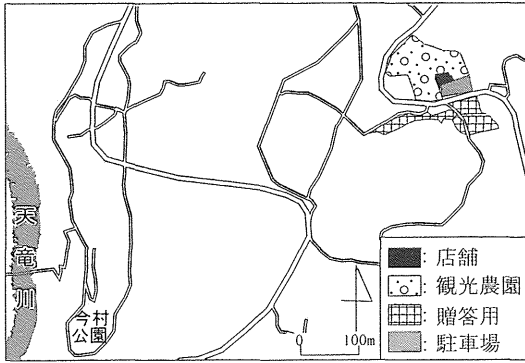
価格は2万円である(第2表)。加工品にはリンゴジュースやリンゴジャム、アップルバター、プラムジャム、山ぶどうジャムがあり、これを店舗で販売している。宅配の価格はリンゴが5kg 3,500円、10kg 5,500円、15kg 7,500円、リンゴジュースが8本入りで3,500円、12本入りで6,200円である。

## 3) 農家番号3の事例

龍江地区の中央団地に位置している農家番号3は1953年からリンゴを栽培し、開始当時の面積は40aで、その品種は旭、紅玉、国光、ゴールデンデリシャスであり、収穫したリンゴは農協に全て出荷していた。2011年現在、リンゴ栽培面積は2haであり、15種のリンゴを栽培している。農業従事者は50歳代の世帯主と、妻および息子である。息子は20歳代で、2009年から農業専従となった。短期雇用者を摘果時期に100人、収穫時期に150人、年間で250人を雇っている。

観光農園の店舗は自宅の隣にあり、リンゴの果樹園は贈答用と観光農園に分けている(第12図)。2000年代に駐車場を設備し、観光バスは最大15台、乗用車は50台が駐車できる。

宣伝活動としては、毎春、世帯主が約40日、名古屋方面の旅行会社に営業に回り、団体バスツ



第12図 農家番号3の園地分布 (2011年)  
(聞き取り調査により作成)

アーを契約する。2010年には団体バスによる収益が約6割であり、個人の顧客が約4割であった。また、2010年の場合、団体バスは9月末から10月中旬、11月1日から11月10日までが多かった。2011年は8月1日から11月まで開園した。

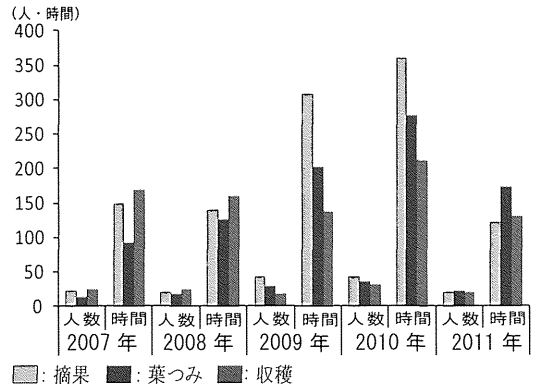
#### 4) 農家番号7の事例

天龍峡東の堀廻地区に位置している農家番号7は、1930年代にリンゴ栽培を始めた。1977年には天龍峡りんご狩り組合に加入し、観光農園経営を開始した。

1930年代当時、リンゴ栽培面積は0.5aであり、農協に出荷していた。現在、リンゴ栽培面積は1.2haであり、ふじが全体の8割を占めている。農業従事者は60歳代の世帯主と妻である。30歳代の息子はいるが会社に勤めており、後継者になるかどうかは決まっていない。

雇用労働力は摘果や葉つき、収穫時期にシルバー人材センターから雇っている。第13図をみると、他の時期と比べ、摘果の時期に長く雇っていることが分かる。摘果の時期は1日3人で20日間、葉つみの時期は1日3人で10日間、収穫時期は1日3人で14日間、補っている。また、2007年から現在まで同じ人たちを雇用している。時給は1時間830円である。

2011年は10月15日から11月下旬まで開園し、入園料は食べ放題で500円であった。宣伝活動としては夏前に葉書を150通、年賀状を200通を送って



第13図 農家番号7における雇用労働の人数及び時間

(出勤ノートにより作成)

おり、そのうちの約9割から注文がある。

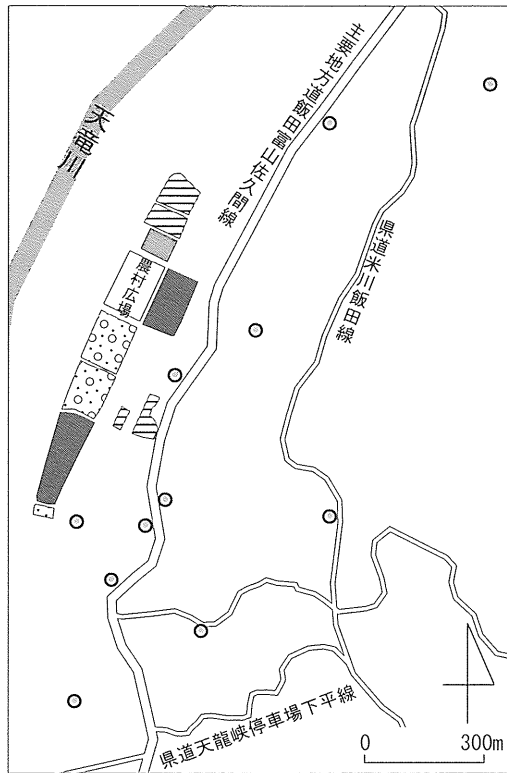
#### Ⅲ-4 新しい観光農園の出現

1985年に天竜川上流の川路・龍江・竜丘地区の治水対策事業として、約98haの土地を計画高水位まで盛土する工事が、国土交通省中部地方整備局、長野県、飯田市、中部電力株式会社の共同で行われ、2002年に工事が完成した。

農業法人Iは1997年に設立され、この盛土された耕地で2002年から農業法人Iがリンゴやブドウ、柿などを栽培している。農業法人Iは農業を都市住民との交流の場として活用し、グリーンツーリズム方式での営農が会社の理念である。

法人設立時、メンバー14名の大半は50歳代であり、その後、会社を定年退職した人々は専業農家になった。現在のメンバーは11名である。第14図をみると、11名は耕地のある旧氾濫原の近隣に住んでおり、兼業農家が7名、専業農家が4名である。92歳から60歳までのメンバーで構成されており、60歳代と70歳代が多い。農業法人の代表は月給制であるが、他は社員である。社員以外に常に4人を雇っている。

2012年、リンゴの栽培面積は2ha、ブドウ1.5ha(うちワイン用ブドウ1ha)、イチゴ0.5ha、水田が1ha、柿が2ha(2009年に1ha拡大)である(第14図)。リンゴは5種類を栽培しているが、うち



◻: リンゴ ◼: ブドウ ◬: 柿 ◽: イチゴ  
 ○: 会員の家

第14図 農業法人Iの果樹園及び会員の分布 (2012年)

(聞き取り調査により作成)

8割がふじである。リンゴ狩りは10月初めから11月中旬まで実施している。また、ブドウは6種類を栽培し、8月10日から9月末まで開園する。イチゴの品種は2種類であり、2月1日から5月初旬まで開園している。リンゴ狩りの入園料は500円、ブドウは600円で、ともに時間制限はないが、イチゴの入園料は1月から2月まで30分で1,500円、3月から5月までは1,200円である。2008年からリンゴオーナー制度を始め、1本2万円が60kgを保障する。リンゴオーナー制度用の果樹園の収穫時期は毎年11月3週目の日曜日であり、顧客の居住地は中京圏の範囲とほぼ重なる。

南信州観光公社からの支援により、毎年5月～7月と9月に中学校修学旅行の農業体験団体が訪れる。農業体験は田植え体験、稲刈り体験、果樹

作業体験、イチゴ作業体験、ジャム加工体験などがある。また、農業体験が終了すると、生徒は4～5人程度のグループに分かれて社員の自宅にホームステイをする。

#### IV 結論

本稿では、飯田市天龍峡の東側に位置する龍江地区において、観光農園の展開と経営特性を明らかにした。その結果は以下のようにまとめられる。

龍江地区では1930（昭和5）年からリンゴ栽培が始まった。天龍峡のつつじ橋が1955年に完成すると、川路側の舟つき場から下船した観光客が橋を渡って龍江側に来るようになった。これを契機として、天龍峡に近接する農家によって直売が始められた。1964年、飯田線で「りんご狩り貸切臨時列車」が運行されると、天龍峡を中心に観光農園が開設され始めた。さらに1975年に中央自動車道が開通し、中京圏からリンゴ狩りに訪れる観光客が増加した。同年、天龍峡観光組合が発足し、翌年には農協と協議の結果、天龍峡りんご狩り組合が設立され、17軒のリンゴ農家が本格的に観光農園を始めた。観光農園に多くの観光客が訪問した時期は1975年から1990年までであり、企業の団体旅行や旅行会社からの依頼が大量に組合になされた。これにより、観光農園を始めるリンゴ農家も増え始め、36戸を超えた時期もあった。2012年現在、龍江地区における観光農園は28軒である。

バブル期以降、天龍峡を訪れる観光客が減少したことが影響し、1990年代半ばから観光農園の観光客も減少した。また、観光農園が開始された当初は天龍峡への訪問客が観光農園に立ち寄る傾向があったが、現在はリンゴ狩りを主目的とする訪問客が中心である。2010年1月に天龍峡りんご狩り組合は事務所を廃止し、リンゴの収穫時期のみ、臨時事務所を開いており、訪れる観光客に対して情報等の案内をしている。

龍江地区におけるリンゴ栽培面積は、リンゴ栽培の初期と比べて増加した。観光農園の営業開始時期は毎年8月であり、この時期に収穫できる

品種にはシナノレッド、さんさ、つがるなどがある。また、贈答用と秋に訪れる訪問客に好まれるため、ふじが龍江地区の観光農園において7割以上を占めている。しかしながら、近年ではリンゴ狩りよりも贈答用のリンゴの比重が増えており、ふじについてはその栽培面積で贈答用が半数以上を占めている。そして、1990年代からほとんどの観光農園がリフト、SS機、モアなどの機械を個人で所有するようになった。また、リンゴジュースの販売は1980年代から始まり、リンゴジャム、梅ジュース、梅ジャム、市田柿なども加工品として販売している。

龍江地区のリンゴ栽培は家族経営であり、不足した労働力は飯田市内のシルバー人材センターを通じて捕われたり、南信州観光公社によるワーキングホリデー参加者を充てている。また、全体の約6割が後継者を確保している。

このように、龍江地区の観光農園においては、開園当時は天龍峡に訪れる観光客が立ち寄るパターンが多かったが、その後、観光農園を主目的に訪れる観光客が主体となる形態に変化した。その結果、経営も直売所から本格的な観光農園へと変化した。また、後継者がいる観光農園は固定客のみならず、新規の顧客を確保するためにホームページやパンフレットなどを通じて、観光客にアピールしている。

栗林ほか(2011)は、須坂市の観光農園はリンゴからブドウが中心になり、1990年代頃からはサ

クランボを導入している農園が多いことを示した。つまり、経営部門の多様化によって、顧客を確保する傾向がうかがえる。一方、龍江地区でもブドウが栽培されているが、そのほとんどは自家用である。また、サクランボを栽培している農家が1戸あるが、龍江地区の気候条件に適さないことや近隣の山梨県に大規模産地があるため栽培農家数は増えていない。むしろ、観光客の訪問可能期間を拡大させるために、龍江地区の農家は新しいリンゴ品種の導入に取り組んでいるといえる。

新しい観光農園として、農業法人が都市と農村の交流を進めるなど、観光農園とは異なった形態も出現している。また、南信州観光公社は、ワーキングホリデー参加者を農繁期にリンゴ農家に紹介しているが、これによって農家は労働力を補うことが可能になるのみならず、飯田市における果樹栽培の知名度を向上させていると考えられる。

以上のように、龍江地区における観光農園は天龍峡に近接していることや中央自動車線の開通により発展した。現在はそれぞれの観光農園が固定客を確保したことで、天龍峡りんご狩り組合の役割は大幅に弱まっている。しかしながら、観光農園を経営する農家の約6割以上が後継者を確保している。20歳代から30歳代の若手後継者の新しい戦略によって、今後の龍江地区における観光農園の存続、また、地域活性化に繋がっていくと考えられる。

現地調査に際し、飯田市役所、JAみなみ信州、南信州観光公社、観光農園の方々には多大なるご協力を賜りました。末筆ながら以上記して感謝申し上げます。

#### [文 献]

五十里佳子(1968):多摩川流域における梨栽培の地理学的研究。岩田孝三編著『観光地理学研究』明玄書房、217-263。

稲村半四郎(1966):観光農業と結ぶブドウ園(山梨県東山梨郡勝沼町)。農業と経済、32(10)、54-57。

岡本啓志(1970):観光地周辺のりんご栽培-群馬県渋川市の場合-。金沢大学教育学部紀要、19、63-76。

栗林 賢・全 志英・磯野 巧・奥羽正昭(2011):長野県須坂市における果樹生産を生かしたアグリ・ツーリズムの展開。地域研究報告、33、29-43。

小池晶子(2002):茨城県千代田町における観光行動からみた観光農園の展開。茨城地理、3、1-17。

下伊那教育会地理委員会(1994):『下伊那誌 地理編』下伊那誌編纂会。

- 助重雄久 (1990) : 鹿角盆地における観光リング園・直売店の展開とその問題点. 立正大学大学院年報, 7, 87-103.
- 高橋栄治 (1964) : 観光果樹園の経営 - 多摩川沿岸ナシ集団産地の事例 -. 農業及び園芸, 39(9), 145-150.
- 田辺一彦 (1988) : 観光農園についての若干の考察 - 兵庫県水上郡春日町春日を事例として -. 人文地理, 40, 355-367.
- 中山美恵子 (1968) : 勝沼町における観光農業. 岩田孝三編著『観光地理学研究』明玄書房, 237-264.
- 林 琢也 (2007) : 青森県南部町名川地域における観光農園の発展要因 - 地域リーダーの役割に注目して -. 地理学評論, 80, 635-659.
- 龍江村誌編纂委員会 (1997) : 『龍江村誌』同刊行委員会.
- 半澤早苗・杉浦芳夫・原山道子 (2010) : 東京都練馬区におけるブルーベリー観光農園の立地とその現状. 観光科学研究, 3, 155-168.
- 藤井信雄 (1988) : 観光と農業の関わりの変遷. 月刊観光, 6-9.
- 山村順次・浦達雄 (1982) : 都市化地域における観光農園の動向 - 川崎市多摩川沿岸を例として -. 新地理, 30(2), 1-18.